



特別寄稿

「ケネディ米国大統領が最も尊敬した日本人」

電気電子システム工学科 長野 眞 康

学生の皆さんは、ケネディ米国大統領をどの位知っているだろうか。ニューフロンティア精神を掲げ1960年に43歳の若さで米国大統領に選ばれ、ソ連との核戦争勃発の可能性があったキューバ危機を救った指導者として有名である。また1962年暗殺者により悲劇的な死を遂げたこともよく知られている。

この若き大統領が就任時に、日本人記者団から、「貴方が日本で最も尊敬する政治家は誰ですか」と問われて、「上杉鷹山（うえすぎようざん）」と答えている。しかし、日本人記者団の中で、上杉鷹山の名を知る者はいなかった。上杉鷹山は、江戸時代の名君として戦前の修身の国定教科書には記述されていたが、戦後日本ではあまり取り上げられることがなかったからである。では、ケネディ大統領が、どのようにして「上杉鷹山」を知ったのか。それは、1908年に、内村鑑三が英文で書いた「代表的日本人」という本の中で、優れた日本人5名が紹介され、その中に上杉鷹山が含まれていたからである。

「代表的日本人」の和訳（岩波文庫）を開いてみると、その冒頭で、内村鑑三は「わが国民の持つ長所を外の世界に知らせる一助となることが、本書の目的である」旨述べている。すなわち、当時の西欧社会におけるキリスト教徒から、異教徒として見られていた日本人にも、優れた人々がいることを示すために、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮の五人を取上げて、その人となりを紹介したのである。上杉鷹山に関する記述は、以下のとおりである。

- ・九州の小大名秋月家の次男として生まれた鷹山は、10歳で名門上杉家の養子となり、17歳で米沢藩の藩主となった。当時、米沢藩は、外様大名として相次ぐ減封の中で、多くの家臣団を抱え、多額の債務に苦しんでいた。
- ・藩主となった鷹山は、極貧状態にあった米沢藩の財政を建て直すため儉約令を発布するとともに、率先して儉約に努め、粗衣粗食に耐えた。

- ・産業の振興を図るために、武士達を平時には農民として働かせ、荒廃地を広大な農地に変えた。
- ・桑、こうぞ、うるしの木を武士の庭にも植えさせ、それを原料に、絹織物、和紙、漆器を製造・販売し、藩財政と農村復興の基盤とした。
- ・閉鎖されていた藩校を再興し、藩士の子弟だけでなく、農民や商人の子供も一緒に学ばせた。また、才能はあっても貧しい家の子供に教育の機会を与えるため、奨学金を与えて学費を免除した。
- ・医学校を開設するとともに、西洋医学を積極的に取り入れさせた。
- ・また、領民をわが子のように大切に育て、血の通った統治組織および農民の互助組織を整備した。

このような努力を50年間にわたって続けた結果、人々の暮らし向きは改善され、藩の蓄えも充実し、東北地方を襲った天明の大飢饉においても、米沢藩では餓死者は一人も出なかったといわれている。

上杉鷹山の生き方は、童門冬二著による小説「上杉鷹山」に描かれ、またNHKでもテレビドラマ化されている。バブル崩壊以降の長い不況の中で、鷹山が用いた様々な方法を参考にして自社の経営を立て直した経営者も多いのではないだろうか。

鷹山は、家督を譲るに際して、後継者に「伝国の辞」と呼ばれる三か条の言葉を贈っている。その一つに、「人民は国家に属したる人民であり、藩主が私するものではない」との言葉がある。この言葉から、鷹山は封建君主でありながら、民主主義的な思想を持っていたことが窺える。

最後に、伝国の辞と同時に、和歌の形で、後継者に贈った現代にも通じる名言で結びとしたい。

「なせば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」（現代訳：やればできる。やらなければ何もできない。できないのは、やろうとしないからだ）←「耳の痛い言葉であるが、忘れないようにしよう。」